

共同教育における「座談」の展開—知の枠組みを問い直す大学授業—

Learning through *Zadan* - A way of promoting interaction between students from different backgrounds

吉野文 西住奏子 和田健

要旨

本稿では留学生と日本人学生の双方向の学びを意図した学部レベルの二つの授業実践を取り上げる。いずれの授業も、「資料・記事を読む」「内容を把握する」「聞く・話す」「書く・考える」の四つの活動で構成されるが、三つ目の「聞く・話す」活動を「座談」と捉え、話しながら考え、相手の話を聞きながら気づきを深めることの意義を検討した。参加者の知識や言語能力の相違を前提とする共同教育において、座談の展開が学生の気づきや理解の変化を促し、動機づけを高めていく可能性を指摘した。

1. はじめに

近年留学生と日本人学生を混在させた学部レベルの授業が多く開講されるようになり、一方向的な留学生支援や単なる異文化交流体験ではなく、双方向の学びを喚起する授業設計の重要性が日本語教育関係者から指摘されている（大島ほか2009：55）。また、「これから社会に出る若者であるという両者の共通点」に着目し、こうした混在授業は、狭義の日本語教育の文脈を超えて展開されるべきだという主張も見られるようになっている（同上：65）。

一方、日本の大学教育に対する社会的要請に目を向けてみると、まず中央教育審議会の『学士課程教育の構築に向けて（答申）』において学士課程共通の学習成果に関する参考指針が提示されていること、とりわけ、その中に「多文化・異文化に関する知識の理解」、「日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができるコミュニケーション・スキル」の修得が含まれていることに留意する必要があるだろう（中央教育審議会2008：240）。

国の政策会議であるグローバル人材育成推進会議でも、「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」の三つをグローバル人材の要件であるとしている（グローバル人材育成推進会議2011：7）。

また、産業界からもグローバル人材を求める声が高まっており、その素質、能力として「社会人としての基礎的能力に加え、既成概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける姿勢、外国語によるコミュニケーション能力、海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心

などが重要」とされている（日本経済団体連合会 2011：1）。

これらの指針からは、多様な文化、価値観への関心・理解、複数の言語によるコミュニケーション能力、未知のものに積極的に関わろうとする態度を養うことが大学教育に求められていることが読み取れる。先に述べた混在授業は、言語的、文化的背景の多様な学生がともに学ぶ場である。参加者の一部または全員が母語以外の言語を用いる必要のある接触場面であり、異なる文化、価値観を持つ参加者一人ひとりがお互いにリソースになりうる。授業の内容と方法の工夫次第によって、社会的要請に応える有意義な学習環境となるはずである。

本稿では、このような双方向の学びを意図した混在授業を共同教育と位置づけ、その一つの事例として、総合大学である千葉大学において全学の学部生を対象に開講されているふたつの授業「日本事情 7・日本事情 8」、「異文化交流演習」を取り上げる。いずれも全学の学部生を対象とする普遍教育科目のうち、「教養展開科目（国際性を高める）」に分類される科目である。「教養展開科目（国際性を高める）」は、日本人学生、学部留学生、短期留学生の共同学習を目指した国際理解、日本理解のための授業科目群で、国際教育センターが運営している。2012年度には、前期、後期合わせて24科目（海外ワークショップなど一部を除く）が開講されたが、日本語のみの授業、英語・日本語を併用する授業、英語のみを用いる授業があり、学生は言語能力と各自の興味・関心によって参加する授業を選択することができる。「日本事情 7・日本事情 8」は日本語で行う授業、「異文化交流演習」は二言語併用の授業である^{注1}。

双方向の学びを促進し、異文化や異なる価値観への理解を深め、コミュニケーション能力を高めるために、ふたつの授業は以下のような方針を共通して採用している。

- (1) 日本社会、日本文化の事象を題材とするが、テーマに関する専門知識を前提としない。既有知識や属性を問わず、学部レベルの学生で授業の趣旨を理解する者であればだれでも受講することができる。
- (2) 話し合いに参加する「場」として授業を捉え、「座談」を授業の中心に置く。「座談」は、意見をまとめてから話すディスカッションやディベート等とは異なり、話しながら考え、相手の話を聞きながら気づきを深める談話形式である（和田 2007：31）。知識の有無や言語能力にとらわれずに、持てる知識の中で話し、かつ相手の話を聞く「場」を作ることを重視する。
- (3) 授業内の「座談」のあとに、「書く」、あるいは、「さらに話す+書く」というように、コミュニケーションが継続し、その中でテーマについて深く「考える」機会を与える。

以下では、第2章で「日本事情 7・日本事情 8」について、第3章で「異文化交流演習」について、「座談」を取り入れた授業実践を報告し、その成果と課題について考察する。

（吉野文）

2. 「日本事情7・日本事情8」(新聞記事を使い時事問題を考える)における座談をめぐ る流れ

本章では2011年度秋学期開講(日本事情8)および2012年度春学期開講(日本事情7)の授業を対象にして、座談を行ったあとに見られる受講生の気づきについて取り上げることとする。

2.1 受講者の決定

まず、受講者の決定方法であるが、この授業科目は、もとより学部留学生にとって必修科目のひとつであるので、留学生そのものの受講制限はできるだけ避けたく思っているが、千葉大学では全学部の日本人学生についても卒業要件になる科目に制度変更していることもあり、双方の受講学生数のバランスに留意した受講者決定を行っている。日本人学生・留学生がともに話をしてそして考えることを前提としているため、双方の比率を考慮した上で、受講者制限をかけるようにしている。

留学生の属性は、学部留学生の1年生を中心に3年生まで、所属学部は【表1】【表2]のとおりである。

【表1】2011年度秋学期日本事情8(受講者19名)

所属学部	日本人学生	留学生		
		中国	韓国	台湾
文学部			1	
法経学部	3			
教育学部	1	1	1	
理学部	1			
工学部	2	3	1	
*特別聴講学生 (短期留学生)		2	2	1
合計	7	6	5	1
		12		

【表2】2012年度春学期日本事情7(受講者28名)

所属学部	日本人学生	留学生					
		中国	韓国	ベトナム	インドネシア	カンボジア	スウェーデン
文学部	3	1	1				
法経学部	3	2					
教育学部							
看護学部	1						
園芸学部	5	2	1				
工学部		1	3	1	1	1	
*特別聴講学生 (短期留学生)		1					1
合計	12	7	5	1	1	1	1
		16					

対象とする2つの授業科目の受講者比率であるが、2011年度秋学期（日本事情8、以下11年度授業と記す）は日本人：留学生は7：12、2012年度春学期（日本事情7、以下12年度授業と記す）は12：16であった。

まず第1回目の講義において、授業の目的について説明をし、受講者の制限について検討していることを伝えている。その際、学生自身の意図していたことと合わない授業であると考えた学生には説明の途中であっても自由に退室してもらうように話をした。授業内容の趣旨については、

- グループで話をしてもらうが、討論であることを前提としない。相手の意見を聞き、自分の意見や疑問などを説明することを心がけること。
- 授業終了後、家に帰ったあとそのやりとりをもとにしたコメントペーパーを必ず書いて提出してもらうことが重要である。ここでは、言い切れなかった反論や自分なりに考えが変化したことなどをコメントできるように心がけること。

（下線は本章執筆者）

と伝えた。もちろん、事前に授業の1週間前に配布する新聞記事を読んでおくことが大前提であることもあわせて伝えている。

ひととおりの授業の流れについて説明したのちに「今一番興味のある時事問題は何ですか？」の課題を翌日までにA4判1枚程度に書いて提出した人を受講対象とすると伝えた。まずこの小さな課題提出を受講の条件とし、その上で内容を見て受講者比率のバランスを見て受講制限をかけることを伝えた。しかし11年度授業も12年度授業もグループバランスは取りやすく、ペーパーを提出した受講者すべてに受講許可を与えることとした。筆者からすれば日本人学生：留学生が1：4～1：1の間に比率が収まると毎回のグループ構成に幅を持たせることができると考えている。

この第1回の授業のあと、ペーパーを出さずに取りやめた学生が、11年度授業は日本人2名、留学生2名の合計4名、12年度授業も日本人学生1名留学生3名の合計4名いたが、12年度の場合そのうち日本人学生2名、留学生3名が追加で受講を申し込んで課題のペーパーを出したことで、【表1】【表2】のような人数構成となった。

2.2 授業の流れと「座談」

授業の流れは【図1】（8頁参照）の通りである。4段階に分けて考えており、②と③が90分の授業、①が授業前、④が授業後の作業となる。

①「場」に入る予備的準備

①で受講者は、あらかじめ配布した新聞記事を読んでおくこととする。ただし読み方は多様であってよいと伝えている。たとえば日本語能力に自信がないという学生は、キーワードにあたるものは何かを記事のなかから探しておくように指示している。大きな見出しや

リードにあたる文章のなかからキーワードを探し、少なくともそのキーワードが何のことかを把握しておくようにする。内容がある程度理解できる学生は、キーワードに関連する内容について、WEBなどでより内容を深く調べておくよう指示している。

もちろん、一言一句読んで理解できるにこしたことはないが、受講者それぞれの理解力、読解力そして語学力など多様である。一律に読みこなせないという前提は全員に強調して伝えている。読み方は多様であってよいが、そのかわり、多くない知識であっても書かれた内容に関連して自分なりの考えをしゃべる準備としての「読み」を指示している。

②「場」にのぞむⅠ 一座談に入る前の準備

②は、90分の授業の前半部分で行う。座談の前に改めて記事の内容について、講義形式で解説をおおよそ20分程度行っている。解説といっても、深く内容を整理することよりも専門用語の容易な説明と、記事が書かれた社会的背景についての説明を重視している。たとえば11年度授業で、TPP参加に関わる民主党内の意見調整に関わる記事を扱ったが、首相が意見集約を指示した背景について、直近の国際会議であるASEANで表明したいことと関わらせて説明を行った。そして、そのような重要な決断を意図したにもかかわらず、じつは国民も政府もTPPの全容や交渉の行方について、正確な情報把握に至っていない状況であることを説明した。このように事実関係として確定した情報が乏しくても、新聞の一面記事になることの意味をどう考えるかを説明した。

基本的には、グループ間で話をする「座談」に入る前には、知識をたくさん頭に入れることよりも、記事の周辺情報を整理して、受講者の理解しうる範囲内で話をしてもらうことを目的に、解説をくどくしないように心がけている。

③「場」にのぞむⅡ 座談

②ののち、授業後半50分から60分程度、グループ単位で座談を行う。授業で扱った新聞記事は本章末の【表3】【表4】(10～17頁参照)の通りである。表の左列にある「対象とした記事」をもとに①②の作業を済ませ、③ではこれらの記事に関連して話し合うテーマ(お題)を受講者に提示し、それに基づいて記事を参照しながら話をしてもらう。お題は、②の解説が終わってグループ単位に受講者が分かれ、それぞれのグループで学生同士が自己紹介してもらっている間に板書する。

お題は、必ずしも討論を前提としたものを出さないようにしている。むしろ、討論をすることが目的のお題は設定しないように努めている。あくまでも相手の話を聞き考えながらしゃべる「座談」であることを強調してお題を提示している。たとえば12年度の授業で「大学改革 授業と入試は一体で」という朝日新聞の社説を取り上げた。このときにはお題として、

「みなさんがどのような入試を受けてきたかを、相手にわかるように説明してくだ

さい。留学生は入試までにどのような準備をしてどのような科目を受けたかなど、日本人学生は受験校の選び方や試験科目について、わかるように説明してください。また自分が受けた入試は、自分にとってプラスに考えるならば、どのような効果があったか、自由に話してください。」

（下線は本章執筆者）

と示した。同じ大学の学生でありながら、学部が違えば日本人学生でも入試のあり方が違い、また留学生の場合、まったく日本人学生とは違う受験準備をして入学試験に臨む。そのことをうまくおたがいに説明して理解してもらいながら、入試までの道筋と現在の大学授業との関わりについて、グループ参加者おたがいの違ったキャリアパスをもとに意見を述べる場にしたいかったのである。

もちろん討論を意識しないようにと努めても、おたがいの相反する考えから討論のようになってしまうこともある。たとえば12年度授業では「胎児異常が理由の中絶倍増 10年前との比較 広がる出生前診断学会が指針作りへ」「出生前診断少ない専門医 親への説明・相談に課題」の2つの記事を扱った。この場合、すべての学生が出産に関わる直接的経験をしていない分、経験に基づいた回答を持ち得ていない。したがって自分なりの育ってきた環境の中で身につけた理念あるいは倫理観において判断をすることになる。経験がない分、自らの考え方が想像の域からは出ないという前提で、

「生む権利や生み育てることへの倫理観、生命観は微妙に社会により違いがあります。各々の倫理観、生命観に基づいて、この記事に掲載されている出生前診断についての考え方を話してみてください。また胎児の立場から見た「生まれる権利」は、法律上解釈は成り立ちがたいものではありませんが、そのことについてはどのように捉えますか。自分の考えを説明してください。」

（下線は本章執筆者）

というお題を出した。難しいテーマではあるが、下線部の状況をどのように個々人が捉えるかについて話してもらおうねらいであったが、出生前の確定診断が出たあとの中絶の是非について話がおよぶ結果となった。男性、女性、そして基盤とする倫理観によって考えが多様であることが場で共有できればと考えたが、中絶のあり方の是非に学生同士グループ内で厳しいやりとりが行われたようである。

このように、お題をめぐっては論戦になることもあるが、基本はグループ内の考え方を参加者全員が示すことを目的として出している。

グループでの座談は、50～60分を想定している。座談の間、お題を出した授業担当者は各グループの横を通り抜けるようにしながら、場の中に入らずに話を傍らで聞く形で進めている。同じ場にとどまらずに、出来る限り通り過ぎるようにしている。

以下④では「場のあとのコミュニケーション」の作業を行うが、これは2.4で記すこととする。

2.3 グループ分けの方法—座談を行う「場」の作り方—

2.1で述べたように、受講者の決定は、グループによる座談を行うために、留学生・日本人学生を一定の割合で各グループに振り分けることが可能かどうかを考えるようにしている。「座談」ではグループ内のバランスを考慮して、各々の立場で話を広げてもらおうと考えている。

各グループによる座談は、できる限り各グループ3～4名（やむを得ない場合は5名）になるように考え、それぞれのなかに留学生・日本人学生がどれくらいの割合になるかを考慮した。

たとえば11年度授業の場合、当初受講比率から日本人1留学生2の割合で1グループ3人（一部4人）として6グループを作るようにした。12年度は日本人2に対して留学生は2になるようにしておおよそ7グループを作った。ただし欠席などがある場合は、ひとつグループをつぶして5名でやってもらうようにした。その場合、日本人1留学生4あるいは日本人2留学生3として、日本人学生が過半数になる状況はできるだけ避けるように調整を行った。

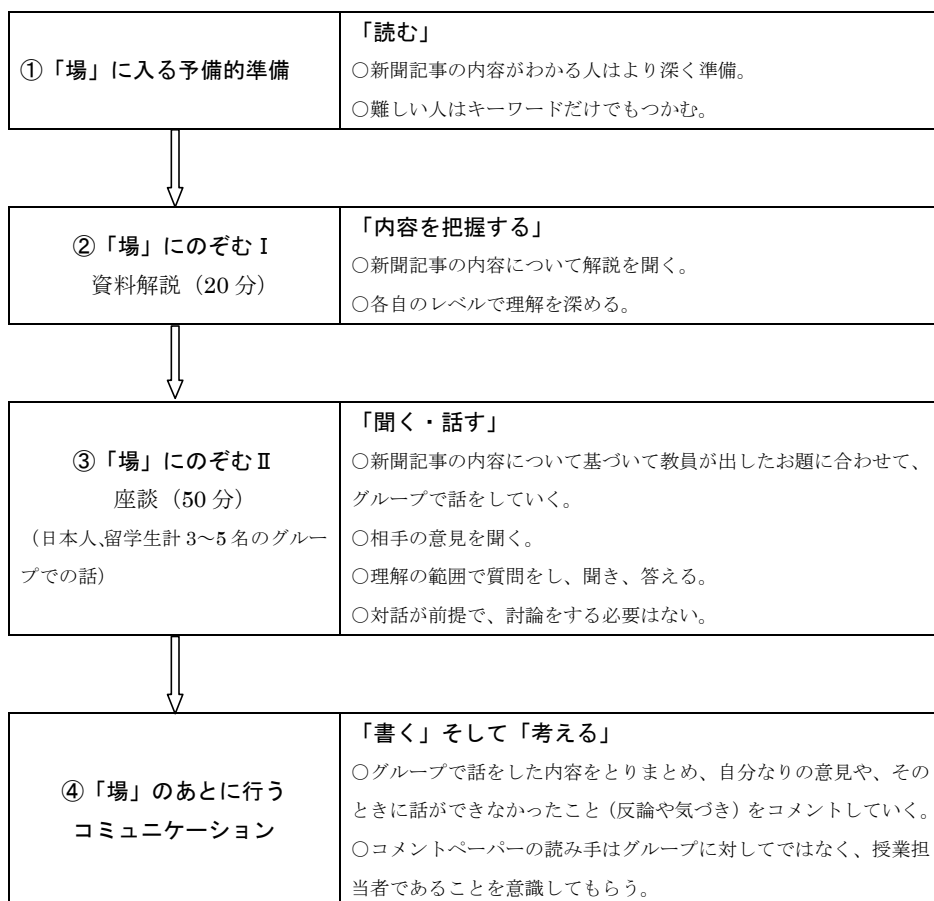
本章筆者は、グループはできる限り3名がよい、という印象を持っており、11年度は3人をどう作るかを考えて組んだが、12年度に関しては4名を基準に作り、欠席によって3名～5名の幅が出る形としている。3名の場合、1人が孤立してふたりで話を進めるということはまずないが、4名、5名になると話がうまくかみ合わない場合、2:2あるいは2:3にグループが2分割されてしまうことが過去の例であった。そのため少人数のなかでも3人が適切と感じていたが、12年度授業を見る限り、5名であっても一体感を持って話している例がすべてであり、必ずしも人数の問題ではないのかもしれない。今後もう少しフィードバックする必要がある。

基本は国をばらつかせることをまず考え、日本人学生のみも避けるようにし、留学生も中国人のみ、韓国人のみというグループ分けも避けるようにした。また取り上げる新聞記事の話題から、男性だけ、女性だけに偏らないように配慮した。先述した12年度授業で出生前診断の記事を使ったときには男性のみ、女性のみグループでは話に多様性は出ないかと思い、男女比率を考えてグループを分けた。この場合、日本人留学生のバランスを崩さざるを得なかったが、男女がおおよそ半々になるように調整をした。

したがってグループは3人を基本として多くても5人までとし、日本人：留学生の比率は一定のものにする、そして男女の割合を話題によっては考慮に入れることとした。

2.4 「場」のあとのやりとり、コミュニケーション

「座談」のあとが授業後の作業であり、【図1】で示した④にあたる。「場」のあとのや



【図1】「座談」にのぞむ前後の作業とその流れ（日本事情7、8）

りとりは以下のような流れで行う。まず授業終了後、学生は次週までにグループワークで話した内容を受講者なりにまとめ、その中で気づいたことをコメントペーパーとして記述する。また、場合によってはグループの中で話されていたことで自分としては批判的に受け止めていたことも出てくることもある。その時、その座談では反論しなくても、このコメントペーパーの中で反論する形を取ってもよい。出来る限りグループ内の発言に留意したまとめをしてほしいが、同時に多様なまとめ方があるので、批判に終始しても、またグループ内の話し合いのあともう少し調べた内容をもとにして自分の意見を中心に書いてもよいとした。この作業は、座談のあとに自分の考えや理解を総括し、そして変化に気がついたかを知る機会である、と位置づけている。

たとえば、グループ内で話をしたあとに、もう少し記事の内容を調べた上でグループ内の話をまとめる書き方をする学生がいる。12年度授業で「ニュースのおさらい ジュニア向け なぜ武道は必修になるの?」を扱ったときに、記事の中には、文科省の調べでは全国の中学で65%は柔道を選択するという内容が記されていた。しかしある韓国の留学生は、全国平均ではなく都道府県によって、必ずしも柔道に偏ってはいないことや武道を中

心にするのではなく、郷土舞踊を中心に据える中学校も見かけることをコメントペーパーで記した。その記述に則って、グループ間で話をした内容において「韓国でテコンドーが必修化される動きがあったが、反対の声が数多あり、武道をやることで愛国心に結びつくとは限らない」とする韓国での事情および自らの見方を話したと記し、武道と伝統という結びつきに対する自分なりの見方を「日本では必修で柔道が多く中学校で選ばれた」という事実と比較しながら、自分なりのコメントを付している。

このようなコメントは、受講者によって提出したコメントペーパーに「添削とリプライを書いて返却してください」と書かれていれば、必ずコメントに対する所感を書いて返すようにしている。また次週の授業で冒頭10分ほど使い、受講者の名前を伏せて、いくつかのコメントを紹介し、受講者全員に自分のコメントとどう考え方に違いがあるかを知ってもらうように伝えている。コメントをした学生の名前は伏せて紹介するが、自分が何を書いたか覚えていることはたしかなようで、ある例を紹介しながらその例を書いた学生の顔を見ると「自分の書いたものがいわれている」と気づいていることがほとんどである。コメント紹介の場では基本的に、書いた内容を肯定的に評価して述べるようにしている。そして自分の考えや意見を、次回のコメントペーパーでも思い切って書きやすい気持ちを持ってもらいたいと思っている。

この作業を重ねていくと、まず自分の意見をはっきりした意思で書ききるコメントペーパーが増えてくる。座談の場は「ああいう考えもあるし、こういう見方もある」でよいとしているが、書く段階になると、回数を重ねるごとに自分の意見が色濃く定まっていくのが特徴である。

2.5 効果と課題

効果も課題も意味づけするにはまだ多くの事例を積み重ねる必要があるが、座談により、まず自分の意見をもとに討論するのではなく、みんながまずはしゃべってみようとするところから、自分の考えと違う見方に気づき、さらに自らの理解を刷新していく流れを見ることが出来る。

「知識がないから意見がいえぬ」のではなく、「知識がなくても話を聞きながら考える」過程は重要である。たとえ、日本語の理解が不十分でも、「このことばの意味は何か？」をグループで問いかけながら、そして聞かれた側はそれに回答をしていきながら、あやふやに思っていたことをはっきりと理解していくことも多い。座談では積極的にスマートフォンやタブレットなども活用しながら、話を進めてもよいとしている。各々違う語学力でも、相手の話を聞きながらそしてWEBなどを使いながら知識を共有していくことで進めていくことは、専門の授業で行う演習とは違う思考回路として捉えられる。専門の授業で行う演習では、事前の準備で知識を整理し修得した上で、ある程度討論できる心づもりが必要であるが、座談は違う。座談は、考えながら聞きながら意見の輪郭を作りながらまとめていき、それを深めるためにあとで必要な知識を集めるという道筋をたどる。知識を準

備して討論するのではなく、しゃべりながら考え、必要にあわせて知識を集めそして考える。それが座談の効果と考えている。

課題としては、座談のあとに行う「書く」ことをどう評価するかである。それぞれの受講者の考え方が変わっていくことは間違いないが、当然授業だけで考え方が変わるものではない。いろいろな授業を受け、またあらゆる日常の経験を積んで、受講者の思考過程は深まっていく。座談のあとの「書く」をどう学生にフィードバックしていくかについては、種々方法を検討していくべきと思っている。

【表 3】 2011 年度日本事情 8 授業内容（第 1 回と最終回のみ新聞記事を扱わず）

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ（お題）の意図
今みなさんが興味関心を持っている記事は何か？				
留学生日本再認識ツアー	朝日 (2011年 10月8日 朝刊 ちば首都 圏版)	原発事故の風評被害で激減している外国人観光客対策として在日留学生に日本の観光の良さを認識してもらうツアーを千葉県いすみ市が実施した。	みなさんは、海外の人々に日本に観光できてもらうためには、どのようなツアー企画を組みますか。原発被害の影響を考えて、プレゼンしてみてください。留学生は母国の人々を意識して、日本人学生は各々が想定する国を特定して、プレゼンをしてみてください。	風評被害といえるものや海外で伝えられている原発被害の認識について、現実とのギャップをどう捉え直し、留学生・日本人学生それぞれの立場で、報道されている原発被害の情報をどのようにとらえているか。
食品値上げ 苦悩の春 消費減速回避へ 懸命 メーカー 各社	読売 (2011年 3月1日 朝刊 東京本社 版)	東日本大震災が起こる前の3月当初、コーヒー、食パン、即席麺、食用油などの値上げが行われた。これらの食材は新興国の消費が増えたために生じたコスト高が原因である。これらに各メーカーが割高感を持たせないようにするための工夫をどうしているかを紹介している。	みなさんが考える日常の食料品の適正価格について、さまざまな食品を例として出して考えてみてください。またなぜその金額が適正であると考えるかについて、自由に述べてください。	安ければいいというのではなく、「これならば払える」という観念をお互いどのように持っているか。

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ(お題)の意図
<p>国土地理院にサイバー攻撃 甘いセキュリティ サーバーを「踏み台」に</p>	<p>読売 (2011年 10月28日 夕刊 東京本社 版)</p>	<p>国土地理院が所有する観測データ用のサーバー1台が、「辞書攻撃」と呼ばれるサーバー攻撃を受けサーバーのパスワードを盗まれた。本来セキュリティポリシーでは、パスワードは12～16桁を使うが、このサーバーは5～6桁であったところ、簡単に読み取られるサイバー攻撃にあった。この攻撃により、国土地理院のサーバーを制御しながらそれとつながっている第三者のパソコンを攻撃する「踏み台」にされる可能性も指摘されている。</p>	<p>自らのパスワード管理、セキュリティ管理をどのように考えていますか。キャッシュカード、SNS、メールなど自分の中で他者が入り込んでくることを防御する方法について、自分自身の考えを自由に話をしてみてください。</p>	<p>同じパスワードを使い回したり、桁数が少ないパスワードを使用しているか。セキュリティポリシーについて、各自どのような認識かを意見として出してみる。</p>
<p>味な特産作り 苦い仕上がり 農水省が音頭、 補助金、成功率 5% 9品</p>	<p>朝日 (2011年 10月22日 夕刊 東京本社)</p>	<p>地域ブランド確立のために農水省が後押しした「地域ブランド」の食品開発は失敗続きである。観光の促進につながる特産品を作るための企画であるが、採算が合わない、製造ができないなどの食品開発に陥っているものも多く、事前の事業計画が甘いと会計検査院に指摘されている。</p>	<p>みなさんの出身地で「名産」と呼ばれる食べ物はすぐに浮かびますか。もし浮かぶならば、それは地元の人に愛され、知られているものですか? 個人個人の出身地から事例を出してその特徴を話してみてください。</p>	<p>観光振興に使用される食品は、地元では日常食化していないものも多い。このことをどのように考えるか。それぞれの出身地の事情からグループ同士で話を聞いてみる。</p>
<p>①(社説) 君が代裁判 維新の会は立ち 止まれ ②「君が代」起 立上告審弁論棄 却判決見直し可 能性</p>	<p>①朝日 (2011年 9月21日 朝刊 東京本社) ②読売 (2011年 11月28日 夕刊 東京本社)</p>	<p>橋下徹大阪府知事(当時)が、君が代起立斉唱に関わる職務命令に3回違反した教員は免職とする条例案の提出を考えている。しかしこれと同じ問題で停職処分を受けた東京都の元教員の上告審が、破棄されず最終弁論を行うことになった。そのため司法の最終判断を確認してから条例案の提出について考えるべきである、とする意見。</p>	<p>国旗を掲げ、国歌を斉唱することについて、各々の立場で意見を述べてください。</p>	<p>参加した学生それぞれの出身国で行うことや、日本の国家、国旗に関わる考え方について、必ずしも単一的な考えではないことを確認してみる。</p>

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ（お題）の意図
競争・成果主義を貫く大阪府教育基本条例案とは（中）	朝日 （2011年10月27日朝刊 東京本社）	大阪府議会で審議している大阪府教育基本条例案についての解説。不適格教員に対する処遇、定員割れによる高校の統廃合や校長の降格を盛り込んだ条例案は、競争と成果主義を前提としてもものといえる。	小中高校における、学校同士の競争、先生同士の競争は、今後日本の学校現場でも大きな成果が上がりそうであると見込みますか。自らの経験を踏まえて個々の意見を出してみてください。	中国、韓国などでの教育現場での成果主義的な発想と、この条例案の内容に違いがあるのかどうか。また日本人学生・留学生にとって、直近の高校生活では先生や学校をめぐる成果主義的な見方はどのようなものであったかを話し、そして聞く。
収入も伴侶もないままで置き去りにされる「家事手伝い」孤族の国 第4部 女たち（1）	朝日 （2011年12月9日朝刊 東京本社）	就職、結婚のあり方が複雑になってきている現在、ニートや引きこもりの支援策は男性に偏っている。一方「働きながら子育て」をする女性と対照的に「家事手伝い」から抜け出せない女性を追い込む風潮もある。遠慮しながら生きている、そのような女性たちの声なき声を集めて取材したもの。	女性のライフステージに対する考え方は、社会、個々人多様です。まずは自分の語ることができる範囲で女性は自らの、男性はパートナーとして想定する女性の立場を想像して、就職、結婚、子育て、そしてそのどれでもない生き方について話をしてみてください。	ライフステージは、男女問わず「このようなもの」という観念が強いが、いかに多様であるか、その違う意見に耳を傾けることが可能かどうか、雑談のレベルで感じてみる。
3人産んでみごとに独り孤族の国 第4部 女たち（2）	朝日 （2011年12月10日朝刊 東京本社）	夫と別れて、あるいは死別して独りで暮らす高齢の女性は増加している。孤独死の影を意識しながら、暮らしていく女性たちの事例を紹介する。不安を抱えながらも前向きに生きているが、社会で支える仕組みのひ弱さも感じられる。	みなさんは若くて想像だにしないことですが、自分の人生の終末（最期）をどう考えますか。特に1人で最期を迎えるための心と支えるべき社会のあり方について、自由に意見を述べてください。	孤独死に対する覚悟は独り暮らしならば必要ではあるが、人は何かしら他者とつながっている側面もある。高齢になったのちも、人とつながっている何かを、家族のみならず社会でサポートできる仕組みはあるかどうか、思いつきのレベルでもアイディアを出してみる。

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ(お題)の意図
原発投票 署名 追い込み 21万人分必要 まだ9万 街で居酒屋で奔走	朝日 (2011年 12月10日 朝刊 東京本社)	原子力発電所の是非を問う住民投票をめざし、東京で続けられている署名集めがまだ目標数に達していない。期日の2月9日までに必要数を集めることができるかどうか、その現況取材したもの。	原子力発電所の稼働をなくそうという社会運動(脱原発)について、みなさんのスタンスはどのようなものですか。社会運動に対するみなさんなりの距離あるいは関わりについて自由に述べてください。	「良い、悪い」で語られる問題について、各々の持つ意見は、必ずしも明確である必要はないが、そのことを上手く説明できるかどうか。良いならば、悪いならば、そしてどちらでもないならば、どのような説明が可能かをグループの中で検討してみる。
期末レポートについての留意点の説明	記事を自ら選び、その内容を解説し、社会的背景やコメントをつけることのねらいを説明。要約ではない解説は自分なりに意義を持ってまとめないといけないので、なぜ取り上げたかに留意した文章を書くように指示。			

【表4】2012年度日本事情7 授業内容(第1回と最終回のみ新聞記事を扱わず)

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ(お題)の意図
今みなさんが興味関心を持っている記事は何か?	受講者の確認。日本で起こった社会的な事件、政治、経済、スポーツなどひとつ興味関心のあるものをあげてもらい、その理由を書いてもらう。			
(社説) 大学改革 授業と入試は一体で	朝日 (2012年 4月23日 朝刊 東京本社版)	中央教育審議会で、大学生にもっと勉強をさせよ、という議論がされている。その議論の中でいわれている特徴的なことは、前もって課題を与えて予習させ、議論や意見の発表をさせ、一方通行の授業を改めるべきである、というものである。しかしこれを実現していくためには、入試のあり方と一体的に見直す必要がある。知識の量よりも思考力をはかることで受験生の能力を見極めることが必要で、かつてのように「大学に入ったら勉強は終わり」なのではなく、創意工夫できる自立した人材の養成に大学改革はきているのである。	みなさんがどのような入試を受けてきたかを、グループの人たちにわかるように説明してください。留学生は入試までにどのような準備をしてどのような科目を受けたかなど、日本人学生は受験校の選び方や試験科目について、わかるように説明してください。また自分が受けた入試は、自分にとってプラスに考えるならば、どのような効果があったか、自由に話してください。	留学生の入試の方法を日本人学生は知らず、また留学生も日本人学生の入試をよく知らないところがある。お互い同じ大学の学生だが、どのような経路をたどって学生になったかを確認し合いながら、入試の意味を総括してもらう。

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ（お題）の意図
<p>ニュースのおさらい ジュニア向けなぜ、武道が必修になるの？</p>	<p>朝日 (2012年 4月14日 夕刊 東京本社 版)</p>	<p>中学1、2年生で必修になった武道は、今年度から実施となった。2008年の教育基本法改正により「伝統や文化を尊重し、日本の郷土を愛する態度を育てる」という内容が加わったからである。その中のひとつとして武道の必修化がある。そして必修化により柔道を実施する予定の中学校が全体の64%を占めるという。柔道教室の指導者に手伝ってもらうことも含めてけがの防止に気をつけなければならない。</p>	<p>学校で体育を習う意味は何だと思えますか。それぞれみなさんが学んでいた小、中、高校の体育の様子について各々説明をした上で考えてみてください。また「伝統」「郷土を愛する心」は、教育のなかでどのように学ぶことが可能と思えますか。体育に縛られず自由に話をしてみてください。</p>	<p>それぞれの育った環境における学校制度で「体育」の意味づけが違う。それを確認するために自らの経験を話しながら、不明な点は質問をして補足説明を行ってもらおう。また日本の教育基本法改正が「愛国心」の育成をねらいとして改正されたが、その「愛国心」の育成は、武道から学ぶこととつながるのかどうかについて、自らの経験と絡ませて考えてもらおう。</p>
<p>国籍を替える日本人選手 国際大会出場の手段に</p>	<p>読売 (2012年 1月25日 朝刊 東京本社 版)</p>	<p>体操の塚原選手、マラソンの猫ひろし選手が海外国籍に変えて国際大会出場をめざす動きが注目されている。もともと日本は海外から日本国籍に変えて日本代表として活動する「人材輸入国」であり、それにより各々の競技力をあげていく傾向があった。世界的にも国籍を変えて出場機会を求める傾向はあり、日本でもそのような流れは広がっていきそうである。</p>	<p>自分自身が今の国籍から別の国籍に変えることに対して、どのように考えますか。自分なりの感覚について自由に話をしてください。またスポーツ選手の国籍移動に関してはどのような印象を持ちますか。みなさんの出身国の例を出しながら自由に話をしてください。</p>	<p>「国のために」という発想から「より自分の能力を伸ばす機会に」という国籍を超えた移動について、個人がそして育ってきた環境によってどのような感覚の違いがあるかを話してもらおう。また「国籍」の持つ意味に微妙な違いがあるのかどうかを考えてもらおう。</p>
<p>Jポップの挑戦(2) スター戦略韓国を追う</p>	<p>朝日 (2011年 12月13日 夕刊 東京本社 版)</p>	<p>韓国のKポップでは、最初から韓国国内だけを意識した戦略を立てず、アジアのスターをめざしてトレーニングを積み日本を含めてアジアを市場として意識する。そしてアジア進出をめざして中国語、日本語で楽曲を提供する「現地化戦略」をとる。国を超えた活動は、韓国の経済戦略ともつながり、スターのイメージがクールならば韓国の商品もクールといわれる。ところが海外において、日本で知名度が高い歌手は「初音ミク」といわれ国際的な認知度の高いスターがあまり出てこない。国を超えてのスター戦略が日本製品の存在感、日本の経済戦略とも関わってくるという見方もある。</p>	<p>今後のアジア各国のアイドル（あるいはそれを含めて大衆文化）の市場はどう広がっていくと思えますか。特に日本の中で拡がり定着し受け入れられると同時に、否定的な見方も出てきている韓流ブームを意識しながら自由に話をしてみてください。</p>	<p>日本から見たアジア市場と、アジア各国から見た日本を含めたアジア市場の見られ方は違う。その差異を確認してもらおうことと、「現地化戦略」の中で重要視されることばの問題について、どれくらい重要な意義を持つかを考えてもらおう。</p>

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ(お題)の意図
「総合こども園」創設 企業参入 教育の質確保を	読売 (2012年 4月24日 朝刊 東京本社 版)	現在認定こども園はすでに存在しているが、幼稚園と保育園の一体化を進めるための「総合こども園」の創設を本国会はめざしている(すでに現在は断念)。待機児童の解消をめざし、さまざまな育児環境にも対応することを目的としているが、法案への懸念は大きい。その中でも企業がこども園の経営に参入することで、利潤が上がらなかった場合の容易な撤退と質低下の不安があげられる。「学校」として位置づけられる「総合こども園」ならば教育、保育の質を高めるための指定基準を検討する必要性がいっそう求められる。	小学校に入る前の教育体制について、自分の経験に基づいてどのように捉えて直すことができますか。より教育的側面を意識した方がよいか、長く保育してもらうことに何かしらの重要性があるかどうか、自由に話しながら考えてみてください。	就学前の子供の教育・保育の環境は国により大きな違いがあるし、またそれぞれの国でも育った地域環境により微妙な違いがある。自らの経験で固定化されたイメージがあるならば、それを相対化する機会として考えてもらう。そして政府がめざした「総合こども園」制度のねらいと問題点を検討してもらう。
入れ墨110人 「異様な状態」 大阪市禁止ルール策定へ	読売 (2012年 5月17日 朝刊 東京本社 版)	大阪市内で行った入れ墨をしている職員の調査の中間報告がされ、入れ墨があると自己申告した人は110人であった。そのうち73人が環境局所属でゴミ収集の現業職員である。もともと大阪市内には入れ墨に関する倫理規定は明文化されていないが、今後倫理規定を盛り込み、またコンプライアンス研修を中堅職員まで拡げて行うことを確認した。	入れ墨をしている人と仕事をしたり、仕事をお願いしたりすることは、あなた自身可能ですか?それとも違和感がありますか。さまざまな職種を例に挙げて考えてください。	まず、入れ墨に対する考え方は、人により違う部分と共通のイメージで考えられるものがあることを確認する。その上で、「公務員が入れ墨をやってはいけない」とされる見方の持つ意味を考える。本来ならば、民間でも入れ墨をやってはいけない職種は数多あるはずである。また公務員問題と入れ墨をむずびつける印象を持たせる記事であることから、報道で作られるイメージと違う自分なりの読み方をすることの意味を考えてもらう。

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合うテーマ	話し合うテーマ（お題）の意図
<p>軽減税率5%なら「食品」に適用 2.6兆円減 「電気・水道」は0.6兆円減 消費増税で税収試算</p>	<p>読売 (2012年 5月22日 朝刊 東京本社 版)</p>	<p>社会保障・税一体改革特別委員会で議論されている消費税率引き上げ関連法案で「軽減税率」の是非が焦点となってきた。野党（自民公明）が提案する軽減税率導入の案を政府は受け入れる方向だが、何をどれに対して軽減するかといった対象範囲について議論が注目される。</p>	<p>まず留学生のみなさんが知る限りの出身国の消費事情を説明してください。日本人学生は税込、税別といった価格表示で日常どのようなことに気づき感じたかを話してみてください。その上で、日本では、されていない品目別に違う税率について、納得のいく税率がいかなるものか、新聞記事で示されている税収見込みを参考に自由に話してみてください。</p>	<p>消費税について、各国で税率に幅があったり、使用目的が定まっていたりなど、多様な側面を確認し合う。その上で日本での日常生活で消費増税が与える影響について、自らの学生生活のなかでどのような変化が想像できるかを考えてもらおう。そして軽減税率は、果たして平等な税制なのかどうか合わせて考える。</p>
<p>胎児異常が理由の中絶倍増 10年前との比較 拡がる出生前診断 学会が指針作りへ 出生前診断少ない専門医 親への説明・相談に課題</p>	<p>朝日 (2012年 4月5日 朝刊 東京本社 版 前者は1面記事、 後者は社会面掲載の 関連記事)</p>	<p>高齢出産の増加に伴って出生前診断をする数も多くなっている。しかし現在の診断は精度が完璧というものではないとともに、精度を高める羊水検査では流産のリスクを伴う。また診断ののちの両親の判断を支える仕組みができあがっていないのも事実であり、中絶を選択した場合の精神的ケアも整っていない。今後精度の高いDNA検査がアメリカから入ってくることに備えて、日本産婦人科学会では検査の精度やカウンセリングのあり方をまとめることにした。</p>	<p>生む権利や生み育てることへの倫理観、生命観は微妙に社会により違いがあります。各々の倫理観、生命観に基づいて、この記事に掲載されている出生前診断についての考えを話してみてください。また胎児の立場から見た「生まれる権利」は、法律上解釈は成り立ちがたいものではありますが、そのことについてはどのような捉え方を説明してください。</p>	<p>胎児異常や中絶についての考え方は直面してはじめて悩む問題ではあるが、その判断根拠となる自分の考え方はどこでどのような教え（たとえば宗教あるいは学校教育、親の考え方など）に基づいて身につけてきたものかを考える。そして個々人の考え方は、宗教・社会的事情がほぼ同様な社会集団のなかにあっても、判断の仕方は個々人で違ってくる場合があることを考える。</p>
<p>大人になったゆとり世代（下） 強まる専業主婦指向</p>	<p>読売 (2012年 6月15日 朝刊 東京本社 版)</p>	<p>20代前半のゆとり世代は就職難で思うように仕事に就けないケースも多く、それに伴い専業主婦指向が強まっている傾向が見受けられる。しかしそれは後ろ向きな考えからくる現象ではなく、自己実現できる場として専業主婦があるのならば、こだわりなく選択するゆとり世代の人生観からくるものと捉えることもできる。</p>	<p>自分たちのキャリアプランのなかで結婚や仕事の関わりについて、どのような見通しを立てていますか。またパートナーは仕事や家事育児について、どのようなあり方がよいと考えますか。なかなか想像の域からでないでしょうが、自由に話してみてください。</p>	<p>受講者はゆとり世代といわれ世代に該当する学生たちであるが、自分たちのキャリアプランのなかで、専業主婦（主夫）の考え方をどのように捉え、また仕事とパートナーの関わりをどう考えているか話しながら、日本人、留学生が育った社会そして家庭により自分の考え方が左右される側面を確認する。</p>

対象とした記事	出典	概要	グループで話し合う テーマ	話し合うテーマ (お題)の意図
<p>AKB総選挙熱狂138万票 大島優子さん1位 53万円で2700票 「秘蔵っ子」見つけ優越感</p>	<p>朝日 (2012年 6月7日 朝刊 東京本社 版)</p>	<p>AKB総選挙で会場となった場所に集まったファンは、投票権を何かしらの手段でたくさん集めて投票する。その中でもあえて注目度の低いメンバーを応援し投票することで「自分だけが知っている」という優越感を得て楽しむこともある。総選挙は、次のシングル曲のメンバーをファンによって決める参加型イベントでもある。そしてそれは、総選挙というよりもアイドルを作るという意味で多くの票を投じる株主選挙としての要素がある、という見方もある。</p>	<p>「何かにはまっていく」というプロセスは、自分の逃げ場を発見したり、また自分の能力や経済力以上のものをどう考えるかにつながるかとと思います。みなさんにとって趣味や勉強含めて「何かにはまる」はどう意味づけができますか。自分の趣味を通じてでかまいませんので、自由にグループで話をしてみてください。</p>	<p>AKB総選挙の様子が一部ファンだけのものではなく、全国紙やテレビで放映されることとなっている。また伝え方として、「アイドルにはまる」ことを否定的な論調で示されるものも多々ある。しかしこの記事はあえて投票に夢中になることの意味を比較的冷静に書かれてあり、広く趣味にはまることの意味とつながる筆致でもある。誰もが夢中になれるものの意味づけを、この記事通じて考えてみる。</p>
<p>期末レポートについての留意点の説明</p>	<p>記事を自ら選び、その内容を解説し、社会的背景やコメントをつけることのねらいを説明。要約ではない解説は自分なりに意義を持ってまとめないといけないので、なぜ取り上げたかに留意した文章を書くように指示。</p>			

(和田健)

3. 「異文化交流演習」における座談をめぐる流れ

本章は、2011年度に新たに開設された「異文化交流演習」（秋学期開講）を対象に、座談およびその後のやりとりにおいて見られる受講者の気づきについて取り上げる^{注2}。

3.1 受講者の決定

本コースは定員25名であるが、2011年度は、最初の授業に短期留学生17名、日本人学生28名の計45名が出席、2012年度は、短期留学生16名、日本人学生40名の計56名が出席した。短期留学生に関しては、日本語能力が初級～中級の学生を対象としたコースなので、上級者には辞退してもらい、2011年度は15名（のちに1名履修取消）、2012年度は16名の受講を認めた。日本人学生に関しては、受講者を決定するために、最初の授業で次のふたつについて記述してもらった。

①異文化交流演習は、留学生とともに日本の文化を英語で学び考える授業です^{注3}。この授業の履修を希望する理由を教えてください。

②あなたが最も興味のある“日本の文化”は何ですか。その文化の説明と興味を持っている理由を書いてください。

学生を選抜する際、次の3点に留意している。1) 日本を客観的に捉えているか、2) 異文化に興味を持ち、理解し尊重しようとする姿勢が見られるか、3) 留学生とともに学ぶ意義を自分なりに認識しているか。2011年度は最終的に11名の受講を認め（のちに1名履修取消）、2012年度は14名の受講を認めた（1名辞退）。なお、受講生はすべて学部1年生から4年生である。

日本人学生の所属学部と短期留学生の国籍は、年度ごとに【表5①②】【表6①②】に示すとおりである。

【表5】2011年度異文化交流演習

①日本人学生所属学部

所属学部	人数
法経学部	1
教育学部	6
理学部	1
工学部	2
園芸学部	(1)*
合計	10

②短期留学生国籍

国籍	人数
アメリカ	6
ドイツ	5
タイ	1
インドネシア	1
スイス	1
スウェーデン	(1)*
合計	14

*（ ）内の数字は途中履修を取り消した者の数を示し、合計に反映されていない

【表6】2012年度異文化交流演習

①日本人学生所属学部

所属学部	人数
文学部	1
教育学部	7
理学部	1
工学部	2
看護学部	2
合計	13

②短期留学生国籍

国籍	人数
アメリカ	2
ドイツ	5
タイ	1
インドネシア	1
フィンランド	4
カナダ	1
オーストラリア	1
中国	1
合計	16

3.2 授業の流れと「座談」

授業内容および配布資料の詳細については【表7】に、授業の流れについては【図2】に示す。

ここでは、おおまかな授業の進め方について述べる。①は授業前に準備しておくこと、②③は90分授業内の活動、④は授業後の作業である。

①「場」に入る予備的準備

授業で扱うテーマについて、事前に日英語併記で書かれた資料^{註4}に目を通してくる。少なくとも日英語両方に目を通してくることとし、留学生は自身の日本語能力に、日本人学生は英語能力に合わせて、キーワードを探す、その意味を調べる、あるいはキーワードに関連する資料を探す等、資料の読み方や準備の度合いについては自由とする。

②「場」にのぞむI

授業の最初に、資料の日本語のほうを、週によって日本人学生と留学生が交互に音読を担当する。この作業は、漢字の読み方を確認するという目的も兼ねている。そして、「座談」に入る前の準備として、キーワードの確認と知識の共有を行う。学生たちにとって、例えば葬式、中元・歳暮などといった、それほど身近ではないテーマに関しては、教員がそのキーワードについて、簡単な解説を行う場合もあるが、基本的に学生たちが知っていること、準備してきたことを自由に発言してよい場となっている。そのため、話が多方面におよび、しばしば脱線することもある。

2012年度の授業では、資料の英語のほうを読むこともあった。これは、中元・歳暮、お返し、七五三といった、あまり他国では見られない日本の習慣、伝統や、義理などの日本特有とも言える考え方が、英語でどのように説明できるかを考えるよい機会となると、前年の授業を通して気づかされたからである。実際に、授業後に得た日本人学生からのフィードバックで、「お中元やお歳暮の習慣は、英語の資料によると obligation であると説明されていたが、日頃の感謝の気持ちを伴う贈り物であり、ただの義務ではないと思う

ので、その説明が英語では難しかった。」というものがあつた。

③「場」にのぞむⅡ 座談

3～4人ずつのグループに分かれて教員作成のワークシート（【表7】参照）に基づいて、40～50分の意見交換、つまり「座談」をする。たびたび②で話し合われた内容を引き続き話し合っているグループもあるが許容し、ワークシートもなるべくこなすよう指示する。日によって、日本語で話し合うか、英語で話し合うかは教員が指示をするが、2012年度は日本語によるコミュニケーションが難しい留学生、英語による会話がやや不得手な学生が数名ずついたため、そのことに学生同士が交流の中で気づき、徐々に互いの理解度を確認しながら話し合えるよう、教員が随時助言をした。座談の主な目的は、各テーマの日本における歴史的背景と現代人の認識を比較・理解すること、日本のその文化が留学生の国ではどう理解されているか知ること、そしてその文化自体あるいは似たものがその国にもあるのか、あるのならどういふものなのか知ること、の3点であり、相互に理解し合うことが大切であると考えた。学生のすべき役割は、主に自分自身の考えや習慣等の説明と自文化の紹介となるが、本コースでは、知識は深くなくともとにかく話してみること、話しながら考えること、そして相手の話に耳を傾けることに重点を置いている。座談中、教員はグループ間を歩き、様子を見ている。随時質問を受け付けるが、特定のグループに長く入らないように、また教員という立場ではなく、日本人のひとりとして意見を述べるよう注意している。最後に、意見交換した内容を全体で共有すべく、グループの代表者が話し合った内容を端的に説明する場を設けている。

2011年度の全授業終了後に行った聞き取り調査で、「座談」について受講生からさまざまなコメントを得たが、座談において、何らかのずれを意識し、新たな気づきを得たという。それによって生じた理解の変化の事例を、ここでいくつか紹介したいと思う。

まず、このコースは【表5②】で示したように、アメリカ人6名、ドイツ人5名と短期留学生受講者の大半を占めていたこともあり、一口にアメリカあるいはドイツと言っても、地域によって、また人によって習慣や文化、考え方はそれぞれであるということに気づいた、という学生が留学生、日本人学生ともに非常に多かった。例えば、教育制度や制服の有無、食文化等が、両国とも北部と南部とで、あるいは州ごとで違うということや、宗教に関して、教会が主催する行事の違いから、教会のあり方や子供の頃に教会に通った頻度の違いまで、地域やおのおの家庭によって全く違うのだということに気づいたという。また、自分自身がクリスチャンだという日本人学生は、ドイツは文化や生活習慣がキリスト教信仰に基づいていると思っていて、その通りの部分もあつたが、教会に通うことや宗教的な行事が日本のように形式化している部分もあつてとても意外だった、という感想をもつたようである。そして、インドネシアからの学生は、留学前に国で「日本は単一国家だ」と学んできたが、このコースを通して、全くそうではなく、日本にはいろいろな民族がいて方言もあり、地域によって正月の祝い方や過ごし方、子供の成長を祝う行事や食文

【表7】異文化交流演習の主な授業内容

取り上げたテーマ・事前学習のための配布資料*1	授業当日の補助資料	授業当日の座談ワークシートの内容
結婚式・結婚事情	婚活 (国際交流基金発行の資料より)*2 「5人に1人が生涯独身!」 (2012年10月11日付朝日新聞より)*3	あなたの国では： ・結婚相手とはどのように出会いますか。 ・どのように結婚相手を探すことが多いですか。 ・何歳ぐらいまでに結婚したほうが良いと考えられていますか。 ・お見合いに熱心なのは誰ですか。 ・「婚活」という言葉を聞いたことがありますか。 ・あなたが婚活するとしたら、どのような人を探しますか。 ・婚活と非婚率の上昇、少子化は関係があると思いますか。
葬式 - 日本の葬式 - 出生率と死亡率	死生観 (「日本人の考え方を英語で説明する辞典(本名信行、ベイツ・ホッフア編、有斐閣、1989)」より)	話し合みましょう： ・死生観について ・伝統的な葬式について
教育制度 - 義務教育 - 日本の学校制度	なし	・あなたの国の義務教育期間は何年ですか。 ・学校制度について説明してください。 ・制服がありますか。 ・男子校、女子校がありますか。 ・学校で弁当/給食の時間がありますか。 ・学校ではどんな科目を勉強しますか。 ・学生はアルバイトをしますか。また、どのようなアルバイトをしますか。
七五三 - 子供の成長を祝う行事	なし	・子供の成長を祝う行事がありますか。
食文化	日本料理にトライ (「外国人の疑問に英語で答える本(マーガレット・プライス、伊藤延司著、The Japan Times、1998)」より)	・私の国の料理と言えばコレというものを挙げてみましょう。 ・あなたの国の食事のマナーについて教えてください。 短期留学生へ： ・あなたの国では日本食はどのように思われていますか。 ・日本に来る前と来た後で、日本の料理に対する印象が変わりましたか。

共同教育における「座談」の展開—知の枠組みを問い直す大学授業—（吉野・西住・和田）

取り上げたテーマ・事前学習のための配布資料*1	授業当日の補助資料	授業当日の座談ワークシートの内容
お返し・中元・歳暮	お正月の定番はやっぱりお節料理 (「外国人の疑問に英語で答える本(マーガレット・プライス、伊藤延司著、The Japan Times、1998)」より)	お中元について： ・いつ贈りますか。 ・どのように贈りますか。 ・誰に贈りますか。 ・贈るものの値段はどのぐらいですか。 ・人気のお中元ギフトがあります。何だと思えますか。 ・お中元のお返しはどのようにしますか。 お歳暮について： ・いつ贈りますか。 ・人気のお歳暮ギフトがあります。何だと思えますか。
忘年会・年賀状・お年玉・ボーナス	なし	年末年始の行事、習慣について話しましょう： ・年末はどのように過ごしますか。 ・正月はどのように過ごしますか。 ・年末年始に食べる特別な料理がありますか。
日本のポップカルチャー—漫画とアニメを中心に*4	なし	話し合いましょう： ・どんな日本の漫画とアニメを知っていますか。 ・ジョークや笑いの違いについて ・ストーリーの構成、内容とキャラクターの特徴について
節分・鏡開き・餅、建国記念の日	なし	話し合いましょう： ・正月後の習慣について ・節分について
グループ発表	コメントシート	授業で取り上げたテーマ「結婚・葬式・教育・祝祭日・食文化・漫画とジョーク・童話」と言い伝え・正月」よりひとつを自由に選択、3～4人のグループになって、日本人学生は英語で、短期留学生は日本語で発表を行う。

*1 配布資料は「日本文化を英語で紹介する事典(杉浦洋一著、ナツメ社、1993)」を主に使用している。

*2 2011年度の授業で使用。

*3 2012年度の授業で使用。

*4 2012年度のみテーマとして取り上げた。

化が違い、豊かでおもしろいと感じたそうである。

さらに、学生たちは、それぞれの国の習慣や文化の理解のみではなく、発言やコミュニケーションの仕方に関してもずれを意識し、いろいろな気づきを得たようである。ひとつ事例を挙げると、タイからの学生は、英語で座談に臨んだ際、日本語による座談の時とは様子が違って日本人学生が黙ってしまうことが多く、戸惑ったという。意見がないからなのか、シャイだからなのか最初はわからなかったが、次第にそれは彼らが考えているサインであると気づき、待とうと思うようになった、とコメントしている。このように、座談において、相手の話をよく聞き、理解しようとする気持ちが、態度や感情にも変化をもたらすと言えるのかもしれない。

④「場」のあとのやりとり

「場」のあとのやりとりに関しては、3. 4で記すこととする。

3. 3 「場」の作り方

毎回3～4人のグループに分かれて座談をするが、座談の「場」の作り方、つまりグループの作り方は比較的自由である。毎回同じ人と話さないように、なるべく同じ国の人が固まらないように、少なくとも日本人がひとり入るように、という指示は常に行っている。また、2011年度はアメリカとドイツの学生が、2012年度はドイツとフィンランドの学生が多かったため、1つのグループにふたり入る場合は、違う地方出身の学生が一緒になるようにとの指示も随時し、同じ国でも地方によって文化や習慣、考え方が違う場合がある、という意識につながるよう工夫した。

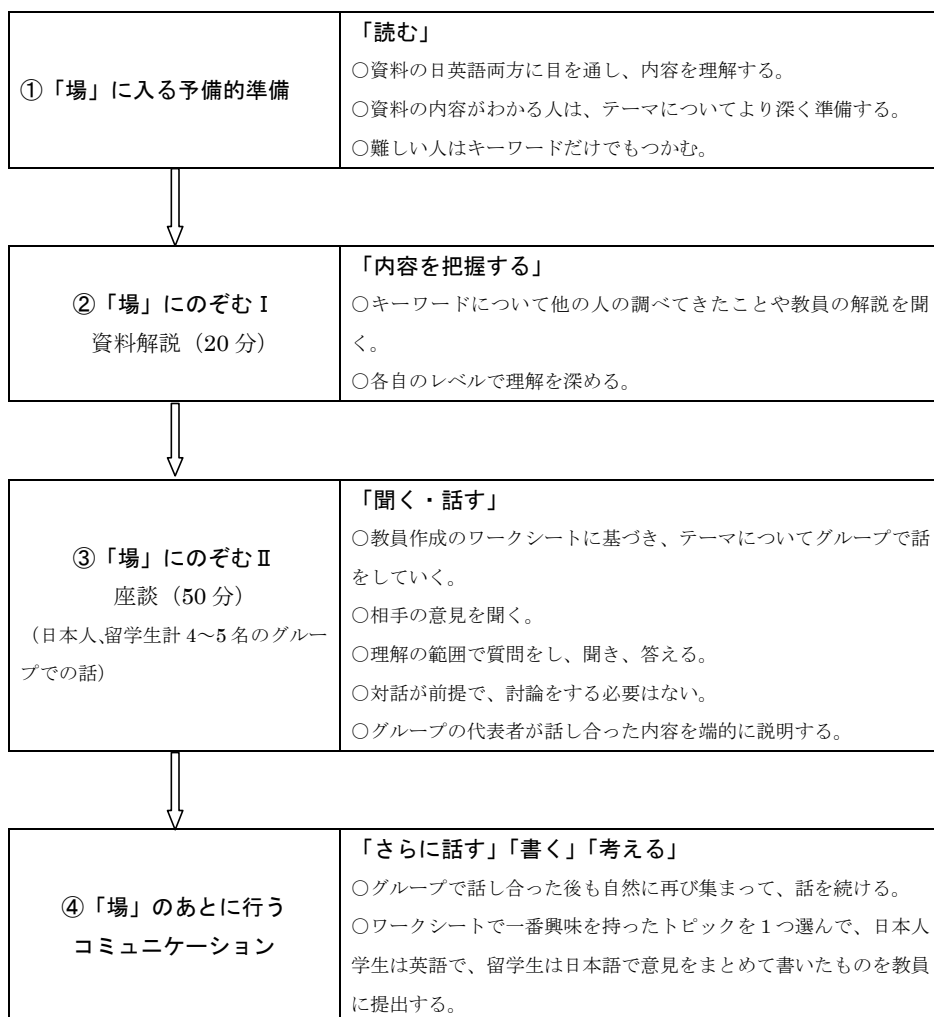
しかしながら、授業後に行った聞き取り調査で、人によっては毎回違う人と話すようにグループ作りをするのが困難だと感じる学生がいたことがわかった。特に、授業が始まって1～2か月はまだ互いに緊張感があり、自分から積極的に声がかけれなかったという。教員が事前に決めたり、くじ引きをしたりするなど、特にコースが始まったばかりの時期はグループの作り方にもっと工夫が必要かもしれない。

3. 4 「場」のあとのやりとり

図2の④にあたる作業をここで説明したい。授業の流れの③の最後に、グループで何を話したか、代表者がその内容を簡単に発表し、全体で確認するが、たいてい「座談」だけでは物足りず、引き続き授業後も意見交換や自身の文化紹介のために自然に教壇の周りに集まってくる学生が多い。そこで興味深い話や意見が出た場合は、次の授業の冒頭に全体に向けて紹介してもらおうこともある。また、2011年度に関しては、授業後に行った聞き取り調査で、短期留学生は特に、授業とはまったく関係のない場でも、他の留学生や日本人学生と、授業で取り上げたテーマについて話す機会が少なからずあったこともわかった。特に、結婚事情や日本の教育制度、中元・歳暮、お返し等の贈り物の習慣については、

日本独特の文化と捉える学生が多く、授業をきっかけに興味を持った学生もいたようだ。2012年度に関しては、ある日本人学生の呼びかけで、授業後に有志が集まり、「勉強会」と称して座談の続きを行っていたようだ。その日のテーマについてさらに意見を交わしたり、授業内では十分に理解できなかつたり聞きとれなかつたりした部分の確認作業を一緒に行っている、との報告を受けている。

また、「さらに話す」以外の「場」のあとのやりとりとして、書く作業がある。2011年度は、ワークシートから一番興味のあるトピックを1つ選んで日本人学生は英語で、留学生は日本語で指定の用紙に意見をまとめてくることとしていたが、残念ながら、徹底して毎回行うことができなかつた。そのことを反省し、2012年度は「コメント・シート」を作成し、座談で話し合ったことのまとめとそれに対する自分の意見と感想を、日本人学生は英語で、留学生は日本語で自由に記述し、毎回提出することとした。教員はすべてのコメント・シー



【図2】 座談にのぞむ前後の作業とその流れ (異文化交流演習)

トに目を通し、コメントや質問を添えて、翌週に学生たちに返却した。留学生の中には、日本語でコメント・シートを書くことが困難な学生もいたが、そのような学生には、英語で書くことを認め、できるところのみ日本語で書いてもよいこととした。また日本人学生の中にも、レポートを英語で書くことに慣れていない学生が多数いたため、基本的な英語によるレポートの書き方を説明した上で、上述の「勉強会」で他学生と助け合ってコメント・シートを仕上げるよう提案した。

3. 5 効果と課題

「座談」の効果と課題を考えるには、事例も分析もまだ不十分であるが、初めての学期を終え、2回目の学期中である今思うこと、そして今後改善したい点をここに記したい。

これまで述べてきたように、授業全体を通して、座談において自分の文化や経験を話し、人の話を聞き、考えながらまた話す、という作業を繰り返すことで、学生は何らかの気づきを意識し、さまざまな気づきを得、これまでの理解を改めていくという流れが見られた。日本人学生も留学生も、最初こそやりとり緊張や戸惑いを感じたものの、次第に打ち解けて、授業内での“異文化交流”に積極的に取り組めたようである。聞き取り調査でも、他国のこと、自国のこと、そして日本をもっと知りたい、現状を正しく理解したい、そして互いにもっと理解しあいたいという気持ちが強まっていったことが、毎回のクラスへの参加のモチベーションにつながった、と自身の気持ちの変化を振り返る受講者が多かった。そして、それぞれの将来の目標、たとえば留学準備や就職活動に、この授業で得た知識や身につけた物の見方や考え方を生かしたいと結んでいた。授業「異文化交流演習」における座談の効果は、周到な準備が必要な専門の演習と違い、知識や語学力が不十分でも、座談の中で人の話を聞き、話し、そして考え、これまでの理解を改めたり、あいまいだった知識を確かなものにできることではないかと考える。またそれが、同年代の仲間との交流の中で経験できることも、有意義ではないだろうか。

今後の課題は、学生同士の緊張が最小限に抑えられる「場」作りと、「場」のあとのやりとりとしての書く作業の充実である。学生たちが、よりリラックスした環境の中で意見交換ができ、そこで得た知識や気づきを自分なりにまとめて書くという作業を通して、意見形成や理解をより深めていけるような授業を目指したい。そのために、まず2012年度授業終了後に、コメント・シートの分析と、引き続き受講生に対する聞き取り調査を行いたいと考えている。

(西住奏子)

4. まとめと今後の課題

2章および3章では、座談を取り入れた授業実践について報告した。学生が座談という場を経験することで、様々な気づきを経験し、知識を確かなものにしながら、やがて自分の意見をはっきりと述べられるように徐々に変わっていく様子が捉えられた。

以下では、座談の場の特徴、動機づけの効果について簡単にまとめ、最後に今後の課題についても触れておきたい。

まず、二つの授業の座談で共通するのは、学生に対し、相手にわかるように説明すること、自由に話すこと、話しながら考えることを促している点である。座談は、目的がある点でおしゃべりとは異なるし、論拠を示しながら意見を述べ合う討論とも異なる。「座談」で話し合うテーマは、正しい答えや結論を求めるようなものではなく、お互いの話を聞き、理解の範囲で質問し、聞き、答えることが基本である。また、教員の介入を最低限にとどめること、話題に関する知識の多様性を尊重することが、学生による座談を活性化するための鍵になっていることがわかった。

さらに、「異文化交流演習」は、留学生には日本語で、日本人学生には英語で学ぶ機会を提供する二言語併用の授業である。もともと学生の言語能力の多様性を前提とするため、教員が状況を的確に判断し、随時適切な指示を出すことが、座談への参加には重要であることも示唆された。

動機づけの面からは、同年代の多様な背景の他者とのインターアクションが、学生の動機づけに強い影響を与えていることが窺われた。「日本事情」では、座談だけでなくコメントシートを教員が読み聞かせる活動も組み込まれているが、これは、座談の後の内省を経た他者の考えを聞く機会となっている。教員からの肯定的なフィードバックともあいまって、自分の考えや意見を思い切って書けるような動機づけとなっている。また「異文化交流演習」では、授業が終わったあとの「勉強会」で、授業を自主的に振り返る会話が生まれている。聞き取り調査では、授業を通して得た将来の目標に触れる学生が多いことも明らかになった。いずれの授業でも、「座談」への参加が、学生たちを学習の次の段階に向かわせる動機づけとして機能していることが窺われた。

現時点で考えられる今後の課題としては、ふたつある。

ひとつは、この実践が、参加者の異文化理解、コミュニケーション能力、積極的な態度の涵養にどのように影響を与えるかを、より実証的に捉えることである。座談の後の「書くこと」がどのような意見形成に結びつくのか、「書くこと」に対してどのようなフィードバックが有効なのかを検討することや、本稿で報告した参加者の認知的変容や参加者の関係構築が、実際にどのように起こっているかを座談の談話の分析を通して捉えることが必要だろう。

また、二点目として、今回の実践で試された、教員による場の組織化が、他の教養教育においても応用可能なものかどうかを検討することが挙げられる。「座談」をひとつの手がかりとして、多様な参加者による共同学習のあり方を引き続き考えていきたい。

（吉野文）

注

1. 「日本事情」は学部留学生にとって選択必修の科目である。「日本事情7」と「日本事情8」は開講学期、取り上げる題材は異なるが同じ内容の授業である。
2. 本節は、2011年度秋学期全授業終了後に受講者13名（短期留学生8名（アメリカ、ドイツ、インドネシア、タイ）、日本人学生5名）に聞き取り調査を行い、その時に得たフィードバックを基に書いている。
3. 本コースは二言語併用（英語・日本語）だが、日本人学生に関しては英語力を問うために、配布した受講者選抜用の資料では敢えて「英語で学び考える授業」とした。
4. この資料は、同時期に開講されている「日本事情2」と共通のものである。同コースは日本語で授業が行われ、日本人学生、留学生ともに履修可能な科目である。「日本社会において見かける（あるいは経験する）であろう社会生活上の慣習について、その意味を概説し、日本人の精神的な部分について語られるキーワードについて考察する（オンラインコースシラバスより抜粋）」コースである。

参考文献

- 大島弥生・岩田夏穂・岡本能里子・小笠恵美（2009）「研究発表パネルセッション：大学授業における留学生と日本語母語話者学生との協働の学びの場の設計」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、pp. 55-66
- グローバル人材育成推進会議（2011）「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/> 2013年3月1日閲覧
- 中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm 2012年2月12日閲覧
- 日本経済団体連合会（2011）「グローバル人材の育成に向けた提言（概要）」
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/062/index.html> 2012年5月22日閲覧
- 和田健（2007）「経験をもとにして「話すこと」「聞くこと」そして「書くこと」—日本事情で扱う時事問題と座談の効果について」『国際教育』第1号、pp. 29-45、千葉大学国際教育センター